

新春随想

高校時代、私は優等生ではなかった。中学校の担任に「君の学力では秋田高校に合格するのは難しい。浪人させるのはかわいそうだから他の高校を受けてくれ」と懇願された程度の学力である。神の気まぐれか奇跡的に入学は出来たものの、授業について行けるはずもなく、私はよく学校をサボった。



高校生の小遣いでは行けるところは限られてくる。下浜海水浴場には四季を問わず行った。大森山動物園では猿山の前で何時間も粘った。そして図書館には毎日のように立ち寄った。

ある時、いつものように明徳図書館に入ろうとした私は足を止めた。入り口からすぐの検索機の前に父の姿を見つけたのだ。反射的に時計を見ると、午後三時。昼休みには遅すぎるし、終業までにはまだ時間がある。同じく私も放

課後といつてごまかせる時間ではなかった。見つかりませんように！ 私はきびすを返してその場から逃げるように立ち去った。

それから十年後、父は私が二十七歳の時に亡くなった。それまで親孝行らしいことを

父が遺してくれた夢

20年度「あきたの文芸」小説部門最優秀賞受賞
渡部 麻実 (平成6年卒)

何もできなかった私は、父の看病のために東京での仕事をやめて秋田に帰り、一緒に最期のときを過ごした。その日々を書いた小説が新聞に掲載されたが、父はそのことを知らずに逝った。母から父が若い頃小説家になりたかったのだと聞いたのも父の死後だった。それから、私は父のためというわけではないけれど、小説を書くことが今も頑張っている。

時、私が話しかけたらなんと言っただろう。父は本が好きで、部屋は大きな本棚に占領されていた。勉強はできなかったけれど父の影響で本を読むことだけは好きだった私。たくさんの本が今の私の血となり肉となっていて、「高校の授業に出なくても、会社で机に縛られていなくても、学べるものはたくさんある」。父はそう言ってくるの

秋高OB、明善OB(福岡)に快勝

東京で初の交流野球

ではないだろうか。それともやっぱ「学生の自分は勉強だ」と叱られるだろうか。戻れるものならばあの日に戻って、父とたくさん小説談義をしたい。そして「私、小説家を目指してるの」と告白してみたい。父はきつと苦笑いして、落ちこぼれな私の頭を叩くだろう。そして渋々なながらも「頑張れよ」と言ってくれる気がする。

高校長が始球式を行い、東大野球部の一年生三人が審判を務めた。人工芝グラウンドの東大球場と、現役の東大や旧部員を借り出したのは、明善出身で東大野球部OBの力添えによる。



試合は、秋田が二回裏、先発左腕投手の伊藤敬さん(昭和五十五年卒)が中越え三塁打を放って先制。投げても三

回を無安打無得点に抑え、主導権を握った。筑波大で昨年まで活躍した佐藤裕輝さん(平成十六年卒)ら元甲子園球児六人を擁する秋田は、打線がつながって着実に加点。この試合を企画した小玉正志さん(昭和五十四年卒)が六回をロングリリーフした。往年の名選手たちが攻守とも随所で好プレーを見せ、秋田が八対三で快勝した。

明善は、早大野球部OB会長の本村政治さん(昭和二十六年卒)が代打で出場。バツクネット裏から真っ赤な横断幕を掲げた応援団が声援を送るなど、野球の盛んな九州らしく、元気はつらつとしたチームカラーが印象的だった。

明善の世話役で、小玉さんとともに交流のきっかけをつくった別府秀喜さん(電通パブリックリレーションズ常務)は「秋田に胸を借りるつもりで臨んだが、やはり風格があった。これを機にいろんな方面に交流を発展させたい」と、今後に期待を膨らませている。現役東大野球部員からフォークで見事三振を奪ってピンチを救った小玉さんは「現役東大生とも対戦できて気持ちよかった。これからもさまざまな交流を続けていきたい」と話している。